

## 「ドイツ学生派遣プログラム参加報告書」

京都大学経済学部 3 年  
慶田駿介

本プログラムは京都大学アジア研究教育ユニットによるドイツ学生派遣プログラムである。ゲーテ大学の大学院生、およびハイテルベルグ大学「アジアとヨーロッパ」研究クラスターの大学院生と研究交流を行い、現地企業や NPO 等を訪問し経済社会事情について産業比較および国際比較の視点から学習するものであった。

本プログラムでは、私の専門であるエネルギーマネジメントに関する調査を行なった。ヘッセン州経済エネルギー交通地域発展庁を訪問し、事前に送付した質問票をもとにインタビューを行なった。インタビューでは担当者に丁寧に回答いただき、ドイツのエネルギー政策からヘッセン州独自のエネルギー問題とそのビジョンなどに関する有意義な回答が多く得られた。また、Anti Nuclear Society という NPO にもアポイントメントを取り、質問票に基づくインタビューを行なった。こちらではより市民社会に近い意見を聞くことができ、エネルギー問題を経済的側面のみならず、社会的側面からみることができた。また Energy efficient building を見学する City tour を市民団体に紹介いただく形で機会を得て、実際に竣工したばかりの最新の建物を視察した。今まで話してきたことが実社会にどのように活用されるかを実感することができ、このようなエネルギー問題が市民の生活に影響しており認知されているところに驚いた。今回のプログラムに参加したことで、エネルギー問題は社会的・政治的な側面と密接に関係しており、経済面のみからのアプローチでは十分ではないことを痛感し、日本国内だけで情報を得るようでは十分でなく、積極的に国際標準を知る努力をしなければならないと感じた。

質問票の作成やインタビューでは英語を活用し、自分の研究に用いる情報を得ることができた。また、一部の資料はドイツ語であったため、ドイツ語での読解も行ない、自身の語学力を正確に認識することができた。今までの語学学習がある程度の成果をあげたことを喜ばしく思うと同時に、まだまだ学習を重ねて語学に自由にならなければ専門の調査にも支障が出ることを身をもって理解した。また現地の学生とも多言語で交流し、単なる英語の使用にとどまらぬ真の国際感覚が身についた。ハイテルベルグ大学のワークショップに参加したことで、ドイツのマスターの授業がどのように行われているかを知ることができたので、今後ドイツでマスターを取得する可能性を視野に入れて考える際の一助となった。加えて、実際にドイツで働く人へのインタビューを通して、将来的に海外で働くという感覚を肌で感じた。今後の進路では、どこかの段階で海外で働きたいとより一層思うようになり、具体的なイメージができるようになった。

以上から、本プログラムへの参加は大変有意義なものであったことをここに報告する。